

新春随想

—プロ意識を忘れずに—

日野病院名誉病院長 玉井 嗣彦



新年明けましておめでとうございます。皆様におかれましては、晴れ晴れと希望に満ちた新年をお迎えになられたことをお慶び申し上げます。

文字通り「光陰矢の如し」です。月日のたつのは早く、子年生まれの私は、満84歳の誕生日を1月2日に迎えましたが、鳥取大学を定年退官後、ご縁があって日野病院に名誉病院長として勤務させていただいてから、恙無く元気で、19度目の新春を迎えました。心より感謝申し上げます。

健康長寿の維持、延命のためには、「朝起きたとき、その日にしなければならない仕事があること」、これは深層心理学者のユングの幸せの条件の一つですが、この名言をモットーに、老骨に鞭を入れて頑張っているところです。

今日の医療界をとりまく“改革の嵐”の中では、“待ちの医療”からの脱却や、“癒しの医療”構想への実現が最大の課題ですが、日野病院管理者の一人として微力を尽くしてきたところです。

まだまだ老後を楽しむ余裕のない私ですが、今でも故 平沢興氏が「生きよう今日も喜んで」の著書のなかで述べておられた「今が楽しい。今がありがたい。今が幸せである。それが習慣となり、天性となるような生き方こそ最高です。」の心境です。皆様方のご心境はいかがでしょう。

世間とのつながりを求めて、私は米子ロータリークラブの「百寿会」の幹事をしています。これは社会奉仕クラブの会合としては、世界でも珍しい百歳まで元気で頑張ろうという同志の集りですが、ユングの幸せの条件の一つにもあるように、何歳になっても、お互い理解しあえる良き友（異性を含めて）を持つことは大切です。還暦以上が会員の資格ですが、健全なる精神活動を維持するためには、医師であったイギリスの哲学者ジョン・ロックの申したとおり、健全なる肉体を有する若い世代の入会も最近否定していません。

社会活動はともかく、今年も眼科専門医として、現場で患者さんと「苦しみや治る希望、喜び」を分かち合いたいと念じています。

ともあれ、患者さんは人生を懸けて病院に来られるので、患者さんが頑張らなくてもよい医療を提供するために、全職員挙げて日々努力しているところです。

自分の仕事にプライドと愛情と誇りを持ちつつ、サービスに徹し、他人との喜びを自分の喜びとすることができる者だけがプロといえます。プロ集団が頑張る医療を提唱してきた一人として、かつて本紙上でもふれましたが、ユーモアの大切さを心にきざみつつ、今後も全スタッフとともに頑張っていきたいと思います。

病院やホスピスの中であれ、教育現場や職場でも、家庭においても、みんなが望むのは温かい生活環境です。その意味で、出発点が思いやりと愛であるユーモアは、自己風刺に根ざしたものとはいえ、ジョークが時に相手を傷つけることがあるのに対して、相手のメンツを壊さないふさわしい表現であるからです。お互い今年も元気で頑張りましょう。